

## 第 17 回 紛争と開発

こんにちは。前回の小林さん、矢崎さんと同様ロンドン大学 SOAS に在籍、開発学部 (Department of Development Studies) の修士課程で「紛争と開発」(MSc Violence, Conflict and Development) を勉強しております高橋 郁と申します。上記のとおりコース名は邦訳すると「暴力」から始まり、やや衝撃的(?)な名称なのですが、開発学が充実しているイギリスにおいても「紛争」と「開発」をコースタイトルとして打ち出しているところは比較的少ないと思いますので、今日はそこをふまえてコース内容とそれに対する私個人の感想をご紹介させていただければ、と思います。

この開発学部の修士課程には私が所属する「紛争と開発」コースのほかにもう1つ、「開発学」のコースがあるのですが、「紛争と開発」コースでは2つの必修科目 + 1つまたは2つの選択科目を履修します。人権、地域研究等、他の学部の科目を選択科目として履修することも可能ですが、大多数の学生は開発学部の中から選んでいるようです。ただここで SOAS ならではの魅力があって、選択科目として語学を履修することができるのです。その語学がさすが SOAS、アラビア語、トルコ語からビルマ語、タイ語、スワヒリ語まで、アジア、アフリカの 28 言語が揃っています(私もこれととてもよかったな…と少し後悔しているのですが)。また、各科目は講義とセミナー(プレゼンテーションとディスカッションが中心)から構成されているため、講義で扱われたトピックについて、セミナーのクラスで考察し、理解を深めることができます。ところが褒めたところでひとつ不満もあるのですが、実はこの履修する科目について言えば、「紛争と開発」と「開発学」コースの違いというのが、必修科目がひとつ異なるだけなのです！つまり、他の必修科目と選択科目は必ずしも紛争に焦点を絞っているものではない、と言えます。こういった意味では、例えば「紛争予防のための開発」のように、「開発」と「紛争」の関係を常に同じ机の上で分析する、という視点は他の科目ではあまりとられていません。しかし講義の後の少人数のセミナーのクラスではクラスによりますが、「紛争と開発」コースの学生は、それぞれの開発トピックに「紛争」という視点を加えてディスカッションすることを求められます。

ではここで、「紛争と開発」コースの必修科目 Political Economy of Violence and Conflict and Development (紛争と開発の政治経済)について見てみましょう。このクラスでは紛争、暴力について政治的、経済的(ときに社会的)側面から分析していきます。ターム1前半のうちはかなり理論中心で、例えば「なぜ『暴力』が存在するのか？」という問いかけに対して、「なぜなら動物のように人間も『ハンター』と『獲物』だから」といった、これまで研究されてきた理論をいくつかとりあげ比較し、その弱点、共通点などを見ていく、といった具合です。実はこのような内容は論理的思考能力が著しく欠如している私にはかなりハードで、課題の文献を読んでも、具体的な例もなしに、どんどん理論が繰り広げられているので、読み終わってもいったい何のことを言っているのかわからない、という状態でした。しかし少しずつ内容が論理的かつ抽象的なものから具体的なものになっていったのと、私が慣れてきたこともあって、「紛争、暴力」をいろいろな角度で分析する、ということを楽しめるようになってきました。ターム2ではジェンダーや宗教と紛争の関係、紛争の経済的影響、人道援助と紛争、デモクラシーは平和を構築

できるのか？紛争解決、紛争復興などのトピックについて取り上げ、この講義、セミナークラスは3月でもってほぼ終了しました。

ではこのコースで何を学んだのか？難しい質問です……が、今じわりと頭に浮かんだいくつかのうち2つをちらっとここで、恥ずかしながらコメントしたいと思います。1つは紛争に対して感情的なものからではなく、政治、経済的要因・影響を踏まえて分析する、ということをしたきこまれた点です。例えば「紛争は開発を妨げるか、または紛争は開発そのものか？」といった問題が出されたとします。以前の私でしたら(単純かつ感情的なため)「紛争なんて人々が命を落とすし、紛争のために無駄に大金使って他にお金回らないし開発にとってもいいわけがない！」と即答していたと思います。しかし、紛争はその地域の中に長く存在していた開発を妨げる社会秩序、パワーバランスなどを変える可能性があります。軍事産業によって国の経済が発展することもあります。このような点を踏まえると「紛争は開発につながる」という見方もできるかもしれません。2つめは、私がもう一つの必修科目で開発理論と最近の開発政策の傾向についても勉強しながら常々感じていたこと、そのセミナー担当の教授もおっしゃっていたことなのですが、冷戦後の低所得国のうち半分が紛争に巻き込まれている状態であるにもかかわらず、これらの開発政策は紛争に巻き込まれている国、地域、人が考慮に入られていない、ということです。

現在は来週あるグループプレゼンテーションに向けての準備に追われています。これは6人ずつでグループを作りあるエリアの紛争について要因、政策等を分析して発表する、というものです。私のグループは世界最長の紛争といわれているスーダンの紛争について調べているのですが、この紛争は奴隷制、植民地、宗教、民族、開発、経済、政治、天然資源など多くの要因が複雑に絡み合って今に至っています。このような複雑な要素を知れば知るほど、紛争解決の難しさ、紛争と国際社会の関わり方、そもそもこのような長期紛争を外部から促して停戦させることは解決につながるのか……など、さらに悩んでしまいます。

このように、SOASの「紛争と開発」コースでは紛争と開発が直接組み込まれているのは1つの必修科目だけであるものの、他の選択科目が全く関係ないわけでは決してなく、難民問題を扱った科目もありますし、上記プレゼンテーションの下調べでは、他の選択科目で養った考え方等も総動員して準備しています。他にこのコースの特徴としては、紛争地域で働いた経験がある学生が多い、図書館が充実している、といったことでしょうか。5月の試験が終了すると後は修士論文が待っているわけですが、このコースで養った論理的思考能力を駆使して自分が今まで興味を持ってきたトピックについて好きなだけ調べて考えて……とできると思うと今から楽しみです。

2004年4月25日

ロンドン大学 SOAS

MSc Violence, Conflict and Development

高橋 郁